

孔子と『論語』（15回）

爛漫と咲き、いさぎよく散る桜は日本人の心の花。心地よく胸が躍ります。
とは言うものの「鄙（ひ）事（じ）」が漂う世情は 2500 年前から普遍。

だからこそ「論語」に意味があります。

どなたでもいつでも歓迎の千葉木鶏クラブです。

皆様のお越しをお待ちしています。

記

1. 日 時 : 平成 28 年 4 月 23 日 (土)
AM 9 時 30 分 ~12 時 00 分
2. 場 所 : 千葉生涯学習センター ☎043-207-5811
<交通案内> JR 千葉駅東口から 徒歩 8 分 駐車場有り
3. 会 費 : 1000 円
4. 演 題 : 孔子と『論語』 「安岡正篤」講和選集より

(1) 『論語』述面第七 孔子の人と道 II

○ 孔子の人柄 ひたむきの感激性

葉公（しょうこう）孔子を子路に問う。子路対（こた）えず。

子曰く、女（なんじ）奚（なん）ぞ、其の人と為（な）りや、憤を發して食を忘れ、楽しんで以て憂（うれ）いを忘れ、老の將（まさ）に至らんとするを知らざる云（の）爾（み）と曰わざる。

○ 好古敏求の人

子曰く、我は生にして之を知る者に非ず。古（いにしえ）を好み、敏にして以て之を求むる者なり。

(2) 『論語』子宰第九

○ 鄙（ひ）事（じ）に多能であった孔子

大宰（たいさい）子貢に問うて曰く、夫子（ふうし）は聖者か。何ぞ其れ多能なるやと。子貢曰く、固（もと）より。天之を縦（ゆる）すに聖を將（もつ）てす。又多能なり。子之を聞いて曰く。大宰我を知れるか。吾少（わか）かりしや賤（いや）し。故に鄙（ひ）事（じ）に多能なり。君子は多ならんや、多ならざるなりと。宰曰く、子云う、吾試（もち）いられず。故に芸ありと。

○ 与に“権る”ことの難しさ

子曰く、与（とも）に共に学ぶべきも、未だ与に道を適（ゆ）くべからず。与に道を適くべきも、未だ与に立つべからず。与に立つべきも、未だ与に権（はか）るべからず。（子宰第九）

[千葉木鶏クラブ](#) [代表兼事務局](#) [丸島 忠夫](#)

[Email : marushima_t@snow.plala.or.jp](mailto:marushima_t@snow.plala.or.jp) [Tel : 0475-25-1211](tel:0475-25-1211) [Fax:0475-38-5153](tel:0475-38-5153)

第 15 回 孔子の人と道 (2)

「安岡正篤」講話選集『孔子と論語』より

(1) 孔子の人柄 ひたむきの感激性

『論語』述面第七

葉公（しょうこう）孔子を子路に問う。子路対（こた）えず。

子曰く、女（なんじ）奚（なん）ぞ、其の人と為（な）りや、憤を発して食を忘れ、楽しんで以て憂（うれ）いを忘れ、老の将（まさ）に至らんとするを知らざる云（の）爾（み）と曰わざる。

<補足>

- ・東福寺の龍喜和尚 「鴛紅燕紫（おうこうえんし）塵となり易し、愛し見る残花の葉底に新たなるを。正にこれ主人安樂の意なるべし。緑陰深きところ別に春を蔵す」（葉底蔵春）
- ・至道無難（ぶなん）禅師 「道という言葉に迷うことなかれ、朝夕己（おの）がする業（わざ）と知れ」
- ・「少（わか）くして学べば壮にして為す有り。壮にして学べば老いて衰えず。老いて学べば死して朽ちず」（「言志録」） 佐藤一斉の言葉

(2) 好古敏求の人

『論語』述面第七

子曰く、我は生にして之を知る者に非ず。古（いにしえ）を好み、敏にして以て之を求むる者なり。

<補足>

能力の三段階： 生知安行 学知利行 困知勉行

(3) 鄙（ひ）事（じ）に多能であった孔子

『論語』子宰第九

大宰（たいさい）子貢に問うて曰く、夫子（ふうし）は聖者か。何ぞ其れ多能なるやと。子貢曰く、固（もと）より。天之を縦（ゆる）すに聖を将（もつ）てす。又多能なり。子之を聞いて曰く。大宰我を知れるか。吾少（わか）かりしや賤（いや）し。故に鄙（ひ）事（じ）に多能なり。君子は多ならんや、多ならざるなりと。宰曰く、子云う、吾試（もち）いられず。故に芸ありと。

<補足>

- ・天を縦（ゆる）すに聖を將（もつ）てす

天縦（しょう）將聖なり」とも読める。

將は大に同じく天縦の大聖で、天縦は天が許した、自由自在にさせたという意味。

- ・大宰（たいさい）

漢代の有名な書物「説苑」の中に、「子貢、大宰（たいさい）をみる、大宰（たいさい） 語（ひ） 問うて曰く、孔子は如何と。対えて曰く。臣以て之を知るに足らざるなり」という話が出ている。

そこでこの大宰（たいさい）は大宰語のことであろうと言われるが確証がない。

とにかくどこかの総理大臣級の人物であろう。

- ・宰曰く

この宰というのはどういう人かよくわからない。「孔子家語」に琴宰という人物が出ており、字は子開、あるいは子張で『左伝』にも琴張の名がある。

(3) 与に“権る”ことの難しさ

子曰く、与（とも）に共に学ぶべきも、未だ与に道を適（ゆ）くべからず。与に道を適くべきも、未だ与に立つべからず。与に立つべきも、未だ与に権（はか）るべからず。（子宰第九）

<補足>

- ・権るという文字は、秤（はかり）の分銅のことである。分銅は秤の竿の目に従ってあちらへ動かしたりこちらへ動かしたりして、計られる物の重さにつり合った所へ持っていくと、秤の竿がピンと水平に落ち着く。そこへ分銅をもって行ってはじめて目方が定まる。これを秤停（しょうてい）という。

責 了